

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：34504

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25570021

研究課題名(和文) ミクロネシア女性たちのオーラルヒストリーで辿る「南洋伝道団」の遺産の再構築

研究課題名(英文) Tracing the legacy of the South Sea Mission through the oral history of Micronesian women

研究代表者

李 恩子 (LEE, Eun Ja)

関西学院大学・国際学部・准教授

研究者番号：50580586

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、ミクロネシア女性たちをはじめ現地の人びとからの聞き取りから「南洋伝道団」の残したものは教会という空間だけではなく、実在したという記憶の語りが続けられていることがわかったことである。これはこの「地域研究」におけるジェンダー視点の必要性を明確にすることにつながる。また、「南洋伝道団」が誰によって、何の目的で送られたのかということを示すことができた。そして、史・資料の分析の中で国家の宗教介入の役割を示すことができた。

研究成果の概要(英文)：The study showed that the role of women is key in maintaining and delivering the legacies of the South Sea Mission and Japanese culture and its spatial legacy. Another product of this study was able to clarify why the South Sea Mission was sent, by whom, and with what aim, by examining primary sources produced by the Japanese government. The research critically reviewed and analyzed the role of religion in relation to state political and colonial policy in the case of the South Sea Mission.

研究分野：社会倫理学

キーワード：オーラルヒストリー 南洋伝道団 委任統治期 ミクロネシア ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始するに至った直接的背景は「南洋伝道団」についての調査依頼によるものであった。少し細かく説明すると「南洋伝道団」の第一陣として1920年2月にトラック島(現チューク島)に渡った日本組合基督教会の牧師であった山口祥吉について調べてほしいというものであった。

山口牧師は赴任中、後継者を日本に留学させ、1930年代には Kimunai(平和)教会も建てた。山口牧師はその教会の初代担当牧師であり、依頼人はその教会の3代目牧師 Saburo Robert 牧師であった。また、彼の父親はその教会の二代目牧師 Ezura Robert. ということから強い要望があった。

彼の名前 Saburo というのは日本名の三郎から来ているというくらい日本について関心があり、具体的には他の島にも日本人牧師が建てた教会が現存しているということもあって、山口牧師を始め「南洋伝道団」に関心を寄せているということが知人を介して伝達された。そして、調査の内容を地域の牧師や指導者を招いてワークショップを開き共有したいということであった。

本研究はこのように始まったものの、現地の人びとも山口という牧師の名前は記憶しているが、宣教団の名称である「南洋伝道団」と言うことも知らないという状態で、まったく基本的なリサーチから始めなければならないというのが当初の実情であった。

このような状況のもと本研究の一番最初のアプローチとして取ったのが、まず南洋群島やミクロネシアについての英語文献で使われている South Sea Mission、つまり「南洋伝道団」というキーワードをもとに論文を探すことであった。その結果、見つけたのが西原基一郎の「日本組合教会海外伝道の光と影 南洋伝道団について」という論文であった。

「南洋伝道団」についてのみ扱った論文は英語、日本語の両方を通じて、この西原のものだけであった。その後のリサーチでわかったことの中には、日本の海外宣教や政府の宗教政策という枠組みで扱われたものなどがあるが、それらも含めて旧南洋群島の宗教に関する先行研究は数本しかないというのが本研究に関連する当初の実態であった。

先行研究が多岐に亘って豊富ではないというのは「南洋伝道団」についての研究に関して限られたことではなかった。この地域に関する領域も、近年すこしずつ増えているが、決して多いとは言えない研究領域

である。研究者が少ないというだけではなく、日本のキリスト教関係者に「南洋伝道団」についての歴史的事実や経緯はほとんど知られていなかった。そのことは調査当初に現在の日本基督教団の主な牧師を訪ね歩くなかで知ることができた。

例として、「南洋伝道団」を送る委員会の代表を務めていた霊南坂教会牧師の小崎弘道の孫に当たる人にインタビューを試みたが「南洋伝道団」に関して何も聞かされていないということであった。その孫は現在祖父の建てた現日本基督教団霊南坂教会で役員をする教会の中心メンバーであるにもかかわらず、そのことについて聞いた記憶はないということが調査過程でわかった。ただ、霊南坂教会100年史には少し記述されているのみである。

このような状況の中で見つけたのが西原の論文以外の研究で「南洋伝道団」について言及している小崎真の「戦時下における日本基督教団の宣教 東亜局を中心に」という論文である。

しかし、これらの研究からは当時の日本政府がどれくらいこの宣教団に関与していたのかということは見えてこなかった。もちろん、関連研究が極めて限られているだけに、小崎の論文も貴重なものであるということとは言うまでもないだろう。

西原、小崎の論文とは違う方法でなされたものに、出岡学の「南洋群島統治と宗教政策 1914~1922年 - 海軍統治期を中心に」という論文がある。この論文は政府側の一次資料をふんだんに駆使したもので、「南洋伝道団」について直接的に深く言及した研究ではないが、本研究にとって大変有用であった。この論文の発見は研究当初ではなかったために、一方で本研究の仮説がくずれ、研究中盤で迷路に入りそうにもなったが多くの示唆を得た。

いずれにしろ、当初の基本的なリサーチの結果は現地の教会指導者たちに向けての報告には一応十分であった。しかし、その時点では小崎弘道が中心的役割を担ったことと、宣教師たちのリストは明らかであったが、本研究者の最も重要な問いの一つである、何故、誰が、何のためにという究極的目的を明らかにし把握できるまでには至っていなかった。

基礎的なこの段階のリサーチで終わることもあり得たが、調査報告のための現地訪問は本研究を更に深めさせるために決定的な要素となった。とりわけ本研究の独自のテーマになったジェンダー視点で「南洋伝道団」の影響とレガシーを見る必要性に迫られたのは現地での女性たちとの出会いが

大きい。

とりもなおさず、それはこの社会が元来母系社会であるということだけではなく、太平洋戦中に日本軍人が増える中、女性たちの身体に多大な影響を及ぼした事が具体的に現れてきたのである。

現地の女性と日本人軍人の間に生まれ、戦後父親たちとの連絡が途絶え遺棄された子孫たちとの出会いや、何十年か経って実の父親との再会話など、統治、戦争をめぐる「男性文化」の中で多くの女性たちが省みられなかったという歴史的事実に直面したのである。

また、「日本文化」の名残として食文化が言語以外にも現地で残っておりその伝達の担い手は女性たちの役割が大きい、つまり彼女たちの「手」と「舌・味」によるものであった。

このような発見と彼女たちの経験の聞き取りは日本語文献でミクロネシアの女性に関する先行研究が皆無に等しかったため、本研究の結果はその時点で予測できなかった。

以上のことが研究当初の背景ときっかけである。

2. 研究の目的

本研究の目的は若干前述したように、まず、「南洋伝道団」を誰が組織して、どのような目的と意図を持ってなされたのかを明らかにすることであった。

また、通算して25年に亘った8人の教師とその家族の移動費や生活費及び宣教活動費などの経済的援助の出所を明らかにすることであった。

送る側の意図や動機などを調べることに加えて、宣教師当事者つまり、組合教会の牧師たちがどのような思いと期待で現地に向かったのかということも遺族や家族を通して調べることであった。

他の側面は日本の文化的レガシーとその影響について調べることであった。

現在アメリカの支配下にありながらも、何故現地の人びとには日本に対する親近感、憧憬が未だに強く続いているのだろうか、などを探ることなども二次的な研究目的としてあった。もちろん、中には太平洋戦争期に家族を亡くした人びとも多くその人々たちは日本に対して決して好感をもっているというものではない。日本に対するその両義的な側面を知るために、彼・彼女たちからそのあたりの「戦争の記憶」を聞き取り調査することも目的の射程に入っていた。

日本人宣教師についてのオーラルヒストリーによる内容、記憶のされた方は変化に富んでいるだろう。しかし、現在も現地の

人びとに受け継がれ、運営されていながら存続している教会という空間、それは現地の人びとにとって「日本」や「日本人」との存在関係性をアメリカの支配下にある現在にまで継続している一因として検証すべきということも研究の目的の一つに据えていた。

その空間と語り継がれてきた「南洋伝道団」の文化的側面のレガシーを女性たちのオーラルヒストリーを辿って再構築することが本研究の目的であった。

可視化できる教会という空間を通しての女性の役割と支配がもたらす歴史の影響とその結果、このような二つの軸を中心に「南洋伝道団」の残したものと、それに限定せず日本の委任統治時代全般の社会的、文化的影響を現地に住む女性たちからその当時の記憶をオーラルヒストリーを通してどのように伝えられているのかを調査することが目的であった。

以上述べてきた複数の目的を本研究の問題意識である植民地主義と宗教の役割という枠組みで検証、分析、議論することも目的の一つとして位置付けていた。

3. 研究の方法

本研究における主要な方法は現地でのフィールドリサーチである。しかし、現地での文献による研究ではなく人びとの記憶に因るオーラルヒストリー、つまり、現地でのインタビューを中心に行うということであった。幸いこの点については、本研究の始まりが現地の人びとからの要請で始まったものであるために、インフォーマットとの信頼関係がある程度築かれていたことは現地調査を容易にする要因となった。

本研究のフィールドリサーチの方法で第一点目の決定的で効果的な方法は英語での直接対話である。

現地の教会指導者、行政機関、そして教育機関に従事している人々は英語を話すことができるため、彼・彼女たちの記憶と空間に関して率直な意見を聞くことができる方法をとることが出来た。

素朴な彼・彼女たちからの聞き取りは貴重な「生の資料」となりそれを有効に活用するという方法であった。そして、比較的女性たちには英語が出来ない人もいたが、通訳者は英語と現地語を日常的に使用している現地のバイリンガルの人びとであったため、交流的なコミュニケーションも取るということを行った。

二点目の方法は日本政府の外務省、海軍関係の公文書の一次資料から「南洋伝道団」を送ることになった政府の介入の経緯を探しそれを分析するという方法である。

三点目は前に述べてきたように本研究に関連する先行研究が限られているということ、そして、本研究の視座が広いということもあり、学際的方法によるところが多かった。

歴史的枠組みのベースとして第一次世界大戦と第二次世界大戦の文献の再読と再考、そして、委任統治時代の南洋群島をめぐる国際政治の議論を援用するものであった。理論的枠組みは、Island Studiesという領域が生まれる背景となった、西洋中心、つまり、大陸中心観へのクリティックを背景にした文献による整理という方法もオーラルヒストリーを再構築する上で有効な方法であった。また、帝国と女性の身体に関する文献の中で太平洋地域を扱っているものを再読するという方法である。

最後に「南洋伝道団」の宣教師たちの遺族を探し、彼・彼女たちから旧南洋群島での生活とその働きについての記憶と聞かされているものを收拾するというものである。しかし、この方法は家族の当時の現地での生活の回顧録が一冊だけ残されていただけで、他の親族へのアクセスは困難でできなかった。

4. 研究成果

本研究の一義的目的であった「南洋伝道団」が送られた背景、つまり、政治的意図に関して政府公文書から明らかにすることができた。また、送られた背景と深く関係する日本政府の旧南洋群島への宗教政策に関する唯一の先行論文から当時の政府の宗教政策、とりわけキリスト教に関する警戒と懐柔政策は、植民地朝鮮や台湾だけではなくたことが明らかになった。そして、その目的と意図について他の日本の植民地での宗教政策との比較する視点から分析した。

これは「忘れられたもう一つの植民地」：旧南洋群島における宗教と政治という論文にまとめ『島国文化と異文化遭遇 海洋世界が育んだ孤立と共生』、森田雅也編に収められた。

最後に本研究の成果として挙げておきたいのは限られた研究領域にジェンダーという視点と「伝統文化」として受け継がれているオーラルヒストリーの重要性を強調することが出来たことである。

また、現地の人びととの複数に亘る調査旅行を通して築いた人間関係はその後SNSなどで関係性を継続できている。このことは、今後の研究にとってもプラスになるうる人的ソースの構築として成果の一つに挙げておきたい。

この結果は研究代表者が新たに採択された科研費/基盤研究(C)が2016年からこう三年間はじまるが、その研究において更に発展させることができるだけではなく、本研究以外にもそのネットワークを他の研究者に共有しようということが期待できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 4件)

李恩子、Japanese mission in Micronesia (1920-1945)、Pacific Asian and North American Asian Women in Theology and Ministry、2016.3.10、Northwestern University (シカゴ、アメリカ)

李恩子、ポナペイにおける日本人宣教の跡をたどる、「島嶼社会における文化受容・交流に関する研究 - 平和的關係構築の視点から」研究会、2015.12.10、関西学院大学 (兵庫県西宮市)

李恩子、「日本帝国」建設における宗教政策の位置、第4回東アジアキリスト教交流史研究会、2014.7.26、福岡女学院 (福岡県福岡市)

李恩子、植民地主義と宗教政策を考える ~ 南洋伝道団の事例から、日本フェミニスト神学・宣教センター定例研究会、2014.5.10、矯風会 (東京都新宿区)

〔図書〕(計 2件)

李恩子、『歴史が医学に出会う時』(翻訳本) 関西学院大学出版会、2016、印刷中

李恩子、『島国文化と異文化遭遇 海洋世界が育んだ孤立と共生』、関西学院大学出版会、2015、247 (147~167)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

李 恩子 (LEE, Eun Ja)

関西学院大学・国際学部・准教授

研究者番号：50580586